

「試練の海に来給う主」

詩篇
マルコによる福音書

第107篇28節～31節
第6章45節～52節

説教 市川 忠彦牧師

男だけで五千人が、身も心も満たされた大饗宴が終わりました。群衆も弟子たちも興奮のつぼにあつたに違いありません。ところが主は、すぐ群衆を解散させられました。人々が主イエスを誤解し、『とらえて王にしようとしてしている』ことが解散の原因だとも言われます(ヨハネによる福音書6章15節)。福音が間違っただけで受け取られそうな場面で、主は弟子たちをあえて試練へと送り出されました。そして主イエスご自身は「祈るために山へ退かれ」ました(46節)。お疲れであった主はしかし、群衆のため、弟子たちのために祈られたのです。

弟子たちが沖へこぎ出し、振り返ってみると夕方の景色に祈っておられる主が見えたのではないかと、ある人は描きだします。そしてやがて闇がすべてを包みこみます。しかし主は、なお山の上から弟子たちをご覧になっています。無理矢理舟に乗り込ませられた弟子たちは、大きな試練に襲われていました。自分たちの願いや計画によってではなく、主に従って歩んでいるのに逆風を受け、主に見捨てられているようにしか思えないのです。

順風満帆に歩んでいる時は、主がすぐ側に居て下さると感じます。しかし、逆風に会うと、あるいは迫害の中にある初代教会の人々は、主の御心が信じられない経験を重ねました。この不信仰、疑いや迷いは、信仰が与えられている私たち自身の問題でもあります。

主イエスは、この弟子たちの姿をじっと見続けておられました。なすすべなく逆風に翻弄され、絶望に苦しむ弟子たちのために、主は祈り続け、祈りの中で一人一人にお心を向けておられました。「こぎ悩んでいる」という《悩む》という言葉は、試金石にこすりつけて本物かどうかを確かめるという意味の言葉です。ただ傷つけるだけではなく、そこで本当の価値を明らかにくださる出来事です。

「夜明けの四時ごろ」、夜の闇が最も暗く、夜明けの兆しが全く見えない時に、主は具体的な救い主として来たり給いました。しかしこの時主は、「そのそばを通り過ぎよう」とされました(48節)。まず声を掛けて下さるのが普通ですが、実は、主が「通り過ぎよう」とされたというのは聖書にしばしば出てくる言葉です。預言者エリヤがホレブ山に逃れて洞穴に隠れていた時(列王紀上19章11節)、また復活の主がエマオへの途上で二人の弟子に現れなされた時もそうでした

(ルカによる福音書24章28節)。

大嵐の中で悩んでいる弟子たちに、主は近づいて来られただけではなく、そのそばを通り過ぎ、なお先に進んで行こうとされたのではないのでしょうか。主は、前進を促し、共に前進しよう、私たちに先だって行かれるのです。主は今や、弟子たちに先だって、ゴルゴタに向かって進んで行かれるのです。

しかし弟子たちは、「幽霊だと思い、大声で叫びました。「みんなの者がそれを見て、おじ恐れた」のです(49節、50節)。《幽霊(ファンタスマ)》というギリシャ語は、幻、本当は存在しないものを表す言葉です。主イエスご自身を目の前にしながら、本当は存在しないものだと思ったというのです。ここに弟子たちの、いや、私たちの不信仰の深刻さが明らかにされています。救い主を待ち望みながら、主が来て下さっても信じていることができないのです。弟子たちは、『私たちに分かるように、私たちが願うような仕方であって欲しかった』と言うかも知れません。この危機的な場面で、自分が思った通りだから信じていいのか、期待通りの救い主なら受け入れるのか、と問われるのです。

主はこのような弟子たちをお見捨てになつたのでしょうか。いいえ、主はすぐ声をかけて言われました。「しっかりするのだ。わたしである。恐れることはない」(50節)。「わたしである」というのは、旧約聖書の時代以来、神様がここに居て下さると宣言なさる時の言葉です。『わたしはここに居る』、とおびえる弟子たちのすべてを包み込み、ご自分に集中させるように、優しく語りかけて下さるのです。

大嵐の中で揺れる初代教会はこのような場面を何度も経験しました。そして嵐の海で、このお方をお迎えして舟に乗って頂いたら、「風はやんだ」(51節)のです。ヨハネによる福音書はこの物語の結末をこう伝えます。「彼らは喜んでイエスを舟に迎えようとした。すると舟は、すぐ、彼らが行こうとしていた地に着いた」(ヨハネによる福音書6章21節)

主をお迎えすることが一番です。そのために、主をしっかりと見つめることができるように祈ることが大切です。詩篇107篇28節～31節によって祈りましょう。

(記 岡村 恒)